

萩藩士「来原良蔵」<sup>くるはらりょうぞう</sup>と兼崎橙堂<sup>かねざきとうどう</sup>

— 吉田松陰の評言 —

會員 兼崎 人士

一、はじめに

幕末の萩藩士・来原良蔵<sup>くるはら</sup>（くりはらとも言う、以下、来原と略記）と、徳山藩士・兼崎昌司<sup>あき</sup>号・橙堂<sup>だいどう</sup>（以下、橙堂と略記）は、ともに西洋砲術を学び藩の軍制改革につくした。

来原良蔵は文政十二年（一八二九）十二月二日、福原家に生まれ、天保十三年（一八四二）、十三歳のとき大組の来原家（七十三石）の養子となる。吉田松陰や桂小五郎（木戸孝允）らと交わり、桂の妹ハル（治子）と結婚した。

萩藩の軍制家・砲術家として活躍した来原は、文久二

年（一八六二）閏八月二十九日、江戸毛利藩邸で自刃し果てた。享年三十四歳。

来原が自刃した二十九日と同じ日に、兼崎橙堂は京都大徳寺で病没した。享年四十二歳。

自分が学んだ最新式砲術・洋式銃陣を使い国難に赴き、新しい時代をつくることが二人の願いであった。

今年（平成二十七年）は、NHK大河ドラマ『花燃ゆ』が放映されている。その同じ激動の時代に、志半ばで二人が没して、一五三年を経過した。

本稿では、『来原良蔵伝』（註①）、橙堂直系の子孫が所蔵されていた『東上日記』（註②）そして『橙堂遺稿』（註

④など史料を使い、来原良蔵や吉田松陰と兼崎橙堂の交流、および足跡・人物像を明らかにしようとするものである。

## 二、来原良蔵との出会い、江戸藩邸

徳山藩主毛利元蕃もとみつは嘉永六年（一八五三）、橙堂に江戸詰めを命じた。同年三月一〇日に徳山を出立し、江戸ばんて番手（藩邸に在番する警固の武士）となる。

江戸詰めとなった橙堂は、江戸に於いて御用間合いの節は西洋流砲術の修行をする旨、予め仰せ付けられている。本格的に西洋砲術を学ぶよう、藩命が下されていたのである。そして同年六月からは、佐久間象山に師事し砲術を学んでいる。この時期、吉田松陰もまた象山に従学し洋式砲術などを勉強していた。

ちょうどその頃、六月三日、浦賀沖にペリー米艦隊四隻が大統領国書を携え来航した。外船浦賀渡来の報は直ちに長州に伝えられ、萩本藩では藩命により、同月二十四日に来原良蔵ら十八名が、江戸に向け萩を出発し

た。

七月十一日、

江戸に着いた

来原らは、暫

く文武の修行

に励むことに

なる。このと

き長州藩江戸

桜田邸で、来

原は八歳年上

の橙堂と初め

て出会ったようである。文武両道に秀でていた来原と、

大坂・堺で長く遊学していた橙堂、お互い気持ちが相通

ずるものを感じていたと思われる。

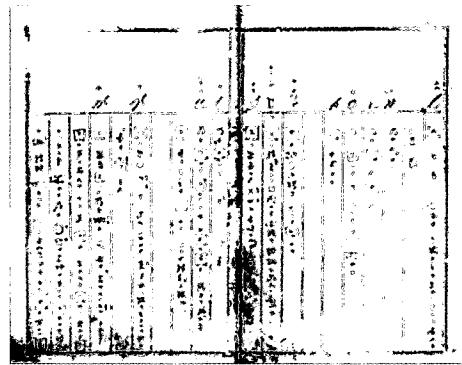


写真1 佐久間象山門下として学んでいたときの橙堂自筆ノート

## 三、相州警衛

嘉永六年のペリー来航により、海防警備の重要性を認識した幕府は、諸藩に相模国などの警衛を命じた。

同年十一月、幕命により萩藩主毛利敬親は、相模国西浦賀から腰越八王子山に至る西南海岸に砲台を築き兵を配し、相州警衛にあたる事になった。

翌嘉永七年三月二十五日、来原は桂小五郎、児玉采女ら六十六人と共に、江戸桜田邸を出発し相州警衛地に赴くことになった。橙堂はその衛戍えいじゆの役の重要性に鑑み、壮行の気持ちを序（漢文の手紙）に認め、来原に贈っている。

萩藩による相州警衛は、単に防備だけでなく管内の民政をあげて一任されたので大規模なものとなった。財政負担の軽減を図り、加えて毛利家一族が結束し協力体制を整え難局に処することが急務であった。

そこで同年四月、毛利敬親は警衛地の一部を四末家に分担させることを決定。その割り当ては、大浦山砲台は徳山藩、八王子砲台は長府藩、稲村ヶ崎砲台は清末藩、荒崎砲台は吉川家となった。徳山藩の相州警衛は安政五年六月まで続いた。

これを受け一年後、徳山藩主もとみつ元蕃は安政二年

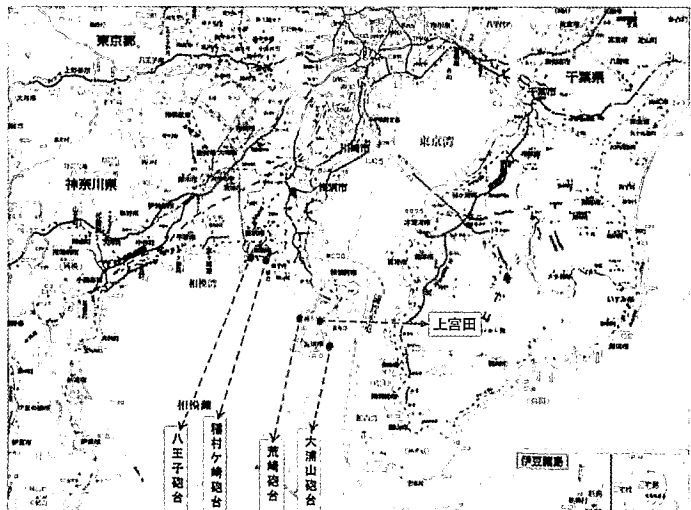


写真2 相模での警衛地（徳山藩：大浦山砲台）

（二八五五）三月一日、江戸詰めであった橙堂に大浦山砲台の監察兼大砲方を任命（註③）。以降、砲台の現場

責任者として外国船襲来に備え警備・護衛の職を勤めた。

同年三月八日に、橙堂は浦賀・上宮田陣屋かみぞだ(長州藩本陣)に到着。引き続き、原陣屋および大浦山台場の授受を終えた。この時、上宮田陣屋に駐在していた来原良蔵と再会し、更に萩藩士・駒井源太や長府藩の河崎虎吉および岩国藩・二宮小太郎ら諸士とも出会い、相州警衛、西洋砲術を通じて親交を深めていった。

#### 四、来原良蔵と伊藤利助(博文)の出会い

翌安政三年九月、十六歳の伊藤利助(俊輔・博文)は警備の一員として、上宮田陣営に派遣されている。こ

こで、組の支配頭であった来原良蔵の配下となり、漢学や武士としての教養・心構え等を厳しく教えられた(註⑥)。また、来原の紹介で橙堂は伊藤利助に



写真3 伊藤俊輔

出会ったようである。

一年後、任期を終え萩へ帰国。その際、来原は『さらに学問を続けよ』と、友人・吉田寅次郎(松陰)宛ての紹介状を利用し与えた。そして来原の紹介で、伊藤は松下村塾に入塾。彼の転機は、来原良蔵によりもたらされたのである。

後に来原のお供をして長崎に行き、洋式銃陣を学んだ。続いて、桂小五郎のおつき役として江戸へ出る。来原のおかげで、若い伊藤は長州藩内一流の人に出逢い、その指導を受ける事が出来た。彼は来原のことを恩師と慕っていた。

後年、明治政府の要職に就いた伊藤は『自分が薰陶を受けた来原良蔵という人は、漢学の素養、経世的見識、精神上的の鍛錬といい、当時断然群を抜いており、感服措く能わざる人物であった。もし来原先生が天寿を保てば、維新の風雲に際会し、真に国家の重責を負うべき政治家たることは論ずるまでも無い。』と述懐している。

## 五、来原へ宛てた書と吉田松陰の評言

来原良蔵は、江戸、浦賀をして長崎で新しい西洋の学問を修めた。安政四年（一八五七）、萩に帰国していた来原は、西洋兵制を萩藩に講義しようとしていた。この事を知った橙堂は、同年十二月に浦賀から盟友・来原良蔵へ書（漢文）を贈っている。西洋兵制の講義は「時未至」と来原を諫めている。橙堂は、藩では佐幕派（俗論派）が主導権を握っており、今は自重すべきである、早まつてはならない。必ずや好機が到来する。」と助言した。

来原はその書を吉田松陰へ渡した。

このとき松陰は、納屋を改修し松下村塾を開いていた。松陰の妹・文が久坂玄瑞と結婚したときでもあった。この時期、松陰の人生にとっては平穩で充実した日々であったと言えよう。

橙堂からの書を読んだ吉田松陰は、共鳴したと見えて、来原に送った書簡（木戸家蔵）の紙尾に朱筆にて、次の評言を書き入れている。

兼崎之言極善。可謂先獲吾心者矣。而所謂時也者僕則有見矣。兄幸待之。向松有一說。僕以為非時矣。然意或疑之。及觀此言。益自信。今不復疑也

戊午三月朔日

寅白

良蔵兄足下

向松とは萩藩士・土屋彌之助のこと。

橙堂が忠告の書を贈った背景には、来原の才能・将来性を誰よりも高く評価していた事があげられる。

来原は相州警衛の折り、浦賀与力の中島三郎助に師事。火薬製造掛となり、操銃や、高島秋帆流西洋砲術・銃陣を学び、最新の洋式兵学に傾倒していった。その熱心さの余り、浦賀の漁師の子供らを集め、自分が習得した洋式兵法などの訓練を始めたのである。

この驚くべき来原の行動により、当時の陣営において彼は異端視され疎まれつつあった。相州警衛が長期化するにもない兵士の士気は低下し、酒に酔い、大砲の未整備、軍令の不行届き等の惨状が表面化していた。それ

に対する来原の怒りが背景にあったと思われる。橙堂は来原が憂国の志士、殉忠至誠であるが故、その前途を深く憂慮していた。

## 六、橙堂、萩へ赴く

安政五年（一八五八）、幕府は日米修好通商条約を結ぶと、摂津の国の海防強化のため同年六月二十日長州藩の相州警衛を免じた。十二月までには相ついで相州の陣営を撤収し帰国、かくして四年半にわたる毛利家宗支藩による浦賀駐在・警備は幕を閉じた。

翌安政六年七月からは、萩藩で洋式の軍事訓練が始まった。同年十月二十七日には、友人・吉田松陰の処刑。その四ヶ月後には、桜田門外の変が起きた。幕末動乱の真つ只中、橙堂は、万延元年（一八六〇）九月十日から十三日まで、銃陣練兵を修養せんとして、萩の来原を訪ねている。このとき橙堂は、徳山藩銃陣副教授となっていた。

九月十日付けで来原は、萩藩に『徳山御家来・兼崎昌

司（橙堂）、この度銃陣練兵修行として罷り越候、右は先年相州御備場詰の節以来、追々引立に相成り候（以下略）』の内容で、四日間止宿、朝夕食事賄いの許可を申請した。相州警衛以来の約三年ぶりの再会、二人が旧交を温めた事は想像に難くない。

来原はこの機に、西洋砲術・銃陣に習熟していたその熱意を練兵場諸士に示した。

## 七、文久二年『東上日記』・・・国事周旋

文久二年（一八六二）五月、兼崎橙堂は江村彦之進らと共に徳山を立出。江戸から藩主元蕃に随従、京都で萩藩士らと連携し国事に尽くした。このとき長州藩は、朝廷へ攘夷を説く京周旋を行っており、元蕃は本藩・敬親父子を補佐していた。同年八月に橙堂は、京都で病没するまでの約四ヶ月を『東上日記』として遺している。

同年七月四日には、来原良藏や桂小五郎らを訪ね話す等と記されている（写真4・参照）。また、八月一日、桂小五郎三日より東行につき、橙堂が書状と餞別（蒸し

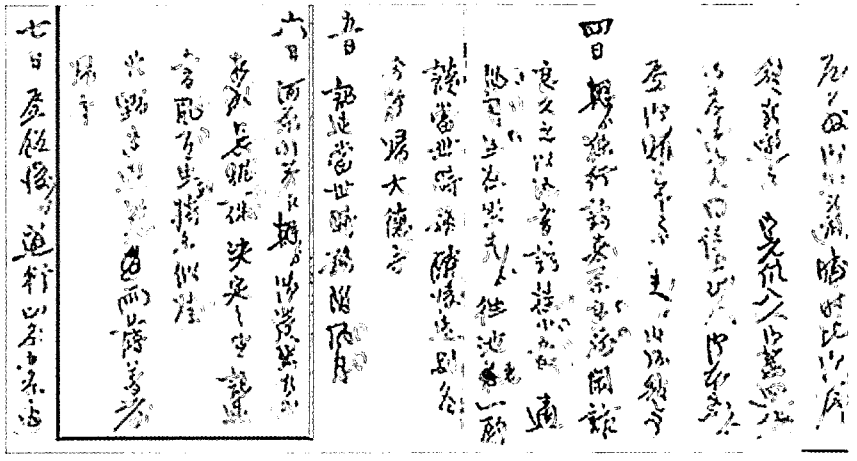


写真4 橙堂が遺した『東上日記』

菓子1箱)を贈った旨記載がある。

八、御前會議・・・藩論・藩是の轉換

同年七月六日、河原町藩邸にて御前會議が開かれた。その結論は長井雅楽(うた)の「航海遠略策(開國進取公武合体)」を破棄し、「奉勅攘夷・破約攘夷」へ、すなわち藩論・藩是の轉換であった。小五郎や久坂玄瑞など尊攘派は、航海遠略策を厳しく批判していた。徳山藩士の江村彦之進や橙堂ら徳山藩士らは、會議に出席していた桂小五郎を介してその報告を受けている(写真4・参照)。航海遠略策の破棄が、長州藩そして来原良蔵の運命を大きく変えた。

九、来原の最期

同年八月二十九日、「忠義と思つてやったことが、すべて不忠不義となつてしまい、自分を誤り人を誤らせた罪はのがれがたく、割腹してお詫び申し上げる……」の遺書を遺し自刃した。

「航海遠略策」を破棄した長州藩は、長井雅楽の失脚、自宅謹慎を命じた。幕府よりの航海遠略策に賛同したと批判され、長井を支持した来原良蔵は自らの責任を強く感じていた。結果的に、藩に迷惑をかけてしまった事を生真面目で忠義心の強い来原は苦慮し思い詰める。「萩に隠退し、切腹して詫びたい」という趣旨の願書を藩に提出した。

藩の重臣・周布政之助らは来原の才能を惜しみ有備館用掛に再任し、江戸下向を命じた。

来原は江戸に向ったが、今度は攘夷ざんぎの魁きとなつて死のうと決意。横浜・外国公使館襲撃を試みたが失敗。そして、世子毛利元徳に諫められる。

翌朝、江戸長州藩邸の自室で自刃し果てた。

盟友・兼崎橙堂も同じ日に京都・大徳寺で病没。大政奉還の五年前、維新夜明け前のことであつた。

桂小五郎は、義弟を救う事が出来なかつた自責の念と遺恨の涙を流した。松陰に続き来原も失つた小五郎は、勤王志士たちのリーダーとしての宿命を背負つて、波瀾

の人生を歩んで行く。

伊藤博文は翌月、来原の遺髪を携え悲しみとともに萩へ帰国した。

京都での徳山藩寓居・大徳寺で病に倒れた橙堂。病状が一行に快復しない中、その知らせは萩藩士にも届いた。その報を聞き、桂と小田村文助かたむら（榎取素彦）は口添えをして宗藩御典医・青木周弼しゅうすけが橙堂を診察した。が、その甲斐もなく閏八月二十九日、生後四ヶ月の嫡男茂樹を残して大徳寺・黄梅院にて没す（四二歳）。

## 十、おわりに

幕末動乱期において、萩本藩と徳山藩が協力し連携（含む志士）しながら最新の西洋砲術を学び、そして軍制改革・近代化に取り組んでいた事が伺える。

歴史の表舞台に立つ前に、志半ばで若くして奇しくも同じ日に逝つた幕末勤皇の志士「来原良蔵」と「兼崎橙堂」。知られざる二人の足跡の一端を紹介した。維新の



曙ともいうべきこの時期、国難に殉じ悲運に散った至誠の人・来原良蔵。橙堂とあわせ、二人の事跡を不朽に伝えることも意義深いといえよう。

明治維新を成し遂げた「長州藩」（萩・長府・徳山・清末各藩を含む本支藩全体を指す総称）の歴史においては、支藩の活動は殆んど語られていない。徳山藩の歴史の掘り起こしと研究によって、新たな真実の解明に努めたい。

#### 橙堂の恩人・福間左衛門青海

嘉永四年（一八五二）、藩校興讓館学頭・福間左衛門の薦めで、橙堂は堺より帰国した。同氏の推挙により許され、兼崎橙堂家再興なる。同年八月一七日、禄高二十石、格式御徒士として召出される。三十一歳。

恩人である福間家の墓は、橙堂の墓と同じ周南市大迫田緑地公園内の「金剛寺墓所」にある。

#### 註

- ① 『来原良蔵伝』妻木忠太著 昭和十五年十一月発行
- ② 『東上日記』兼崎昌司（橙堂）著 文久二年私家版
- ③ 『徳山市史上』昭和三年三月発行、市史編纂委員会
- ④ 『橙堂遺稿』兼崎茂樹著 明治四四年七月発行
- ④ 『橙堂遺稿補遺』兼崎茂樹著 大正六年八月発行
- ⑤ 『徳山名土墳墓掃苔録』兼崎茂樹著 大正八年発行
- ⑥ 『伊藤博文伝』春畝公追頌会編 昭和四五年発行



写真5 兼崎橙堂家の窮地を救った福間左衛門が眠る福間家墓所（周南市大迫田・金剛寺墓所）